



世界の医学の潮流を感じ続けた教育者

黒川 清

東京大学名誉教授/政策研究大学院大学名誉教授/
日本医療政策機構代表理事

私の在米生活が10年ほどたった1970年の終わりごろから、学会などに招かれ日本を訪ねる機会があるようになった。米国の大学で内科のキャリアで活動していた私にも日本の友人たちが少しは注目し始めたのかもしれない。また、日本から米国の学会での研究発表が増え始め、会場でも旧友によく出会うようになっていた。

思いもかけないいきさつで、その数年後に私は帰国することになった。日米の医学教育の改革などについて、日野原先生と意見を交わす機会を持つことができた。いまから30余年も前の話である。先生は、「黒川さん、私の車で次の場所まで送らせるから、遠慮しないで」と言ってくださるので、先生のお車を使わせていただいたことが何度もある。

大きなゆったりした車の先生の座席の前には、椅子の背もたれに付いた小さなテーブルがあり、ものが書けるようになっている。横の席にはいくつもの本が置いてある。これらの本を手にとってページをパラパラとめくってみると、先生は確かに読んでおられるのだ。これには驚き、敬服した。

あれだけ何冊もの本を著わし、毎年

年末年始にはボストンなどを訪問して、米国の医療・医学教育の報告を『週刊医学界新聞』などに書いておられた。頭が下がる思いで何回か先生のところを訪ねた。

80歳を超えてもお元気、90歳を超えてもお元気。先生は米国の医学教育や診療現場での変化についての私の問い掛けに答える十分な知識を持っておられた。私の周りには大学関係者も多いのだが、世界の医学教育・研修の変化の潮流を知らない方たちも多く、何かあるたびに、「いつも先生のようなご長老に意見を伺うなんて、ちょっと変ですね」とお話ししたものだ。

その私も、いつの間にか当時の日野原先生に近い年齢になっている。私には出る幕などないような時代にならなければいけないのだが、世界の潮流を身をもって体験し、実感を持って感じ取れる医学周辺の教育者があまりにも少ないのが気になる。

グローバル時代のさなか、新興アジア諸国が台頭する中で、日本の大学の存在が徐々に薄れているのが私の大きな懸念だ。医学部も例外ではない。以前からのことなのだが、特に医学教育は、かなり遅れている。